第53回（R4．5）

物忘れ狂騒曲

春眠暁を覚えず。未だ覚めやらぬ眠気と気怠さを身にまとい、男は食卓に着いた。今朝は目玉焼きにウインナーを添え、冷奴にお味噌汁とサラダ。朝はしっかり食べるのが、この男の流儀である。先ずは味噌汁をすすり、ご飯を頬張ると奥方に向かって偉そうに。

「おい！
あれはもう無いのか？」
「あれって何のことかしら？」
「あれだよあれ！
昨日の朝食べたあれだ！」
「もう！　あれじゃ
解らないじゃないの」
「う～ん、
ほらピンク色の卵だ」
「そんな派手な卵なんて
存じません」
男の顔は苦痛でゆがむ。その食物の名前がどうしても思い出せない。イライラが募り、その矛先が理不尽にも奥方に向かう。
「何十年も一緒に居て、
俺が何を言いたいか
解らんのか！」

「ピンクの卵で解れなんて
無茶苦茶です」
しばし食卓に
沈黙が流れ・・・
「え～っと、そうだ
魚、魚の卵だ　ピンクの」
「ねえ、もしかして
それって明太子？(笑)」
「そうそれだ！明太子だ！
残ってるだろ」
やっと明太子という名前を思い出し、安堵感に浸る男に、奥方からとどめの一撃が。
「あら、残りは昨日のお昼に
私が頂きましたわ」
「オー　マイ　ゴッド！」

◎これはフィクションであり
実在の家庭・人物とは
一切関係ありません。